

私を所有される神

使徒言行録 27 章と 28 章はローマに向かう使徒パウロの航海と旅行の詳細な記録である。海路 2700 キロ、陸路 180 キロ、時間にして約 4 ヶ月に及ぶ大旅行の記録であるが、これは古代の航海の記録としては、ホメロスの「オデッセイア」を想起させる第一級の航海日誌だと言われている。

古典学者の F.F.ブルースは、この航海に同行したルカはギリシャ人の透徹した目をもって海を観察し、彼の見たことを忘れ難い精彩な文章をもって記録した、と言っている。何故ルカは、こんなにも詳細に航海記録を残したのか。その記事の意図と目的は何だったのか。

ルカには明らかに一つの目的があったと思われる。それは、たとえ現実がどんなに厳しく見えようとも、神は、この世界と歴史に対するご自身の御旨と御計画が必ずなるようにすべてを確実に支配し導いておられる、という神の摂理のみ業の確かさを教えることにある。

福音はローマに伝えられねばならない、パウロがローマに行って福音を伝えることが神の御心であった。しかし現実はその否定しているように見える。パウロは捕らえられ、囚人としてローマに送られようとしている。そして、今、航海の最中、激しい暴風に襲われ、乗っている船は難船の危険に瀕し、助かる希望さえない。

そういう中でパウロは絶望し切った人々を励まして言った、「今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、こう言われました、『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ』。ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずですよ」(22~25 節)。

彼はここで神を「わたしが仕え、礼拝している神」と呼んでいる。「わたしが仕えている神」とは、直訳すれば「わたしを所有している神」である。ここにパウロの、何ものにも動じない信仰の確信の根拠がある。神は生きておられる。パウロを所有しておられる。エウラキロンのだだ中にもおられ、難船のだだ中にもおられ、ついに彼をローマまで導いて行かれる。この神の主権的導きの確かさをルカは伝えたいのである。そして、この神の導きが、今も私たちとともにあることを信じるように私たちを励ますのである。

キリスト者の人生は、しばしば航海にたとえられる。船は主キリストであり、また主の教会である。その船に乗って、丁度、パウロが地中海をローマを目指して進んだように、神の御言葉を羅針盤に、信仰の舵をとり、この世界という地中海を天の御国を目指して進んで行く。

時には風に激しく打たれ、時には大嵐に遭う。時にはエウラキロンに襲われ、時には激浪に翻弄される。しかし、私たちは見捨てられてはいない。キリストの十字架の血潮によって私たちを贖い、今や「わたしを所有しておられる神」は、いつも「わたし」と共におられる。人生の海の嵐の中でも神は共におられて導いて下さる。私たちは、この神の御手の中で守られ、生かされ、導かれている！ここにキリスト者の慰めと励ましがある。